

3-51「第五章 分配関係と生産関係」

エンゲルスは、『資本論』第三部の「序文」で次のように述べています。

「最後に第七篇は完全に書き上げられてはいたが、ただ最初の草案でしかなく、印刷のできるものにするためには、まずその果てしなくもつれあったいくつもの章句を分解しなければならなかった。」

「第五章」の抜粋

※「抜粋」文に「番号」と「タイトル」の付いている文章は、ホームページ5「温故知新」
「1、マルクス・エンゲルスの大事な発見」のマルクス・エンゲルスの著作の抜粋ページ
「A」から「J」で紹介してある文章です。

P1121

「普通の見方にとっては、これらの分配関係(「三位一体的定式」のこと——青山)は、自然的関係として、あらゆる社会的生産の本性から生じ人間的生産そのものの諸法則から生ずる関係として、現れる。」

P1122

「とはいえ、もっと教養のある、もっと批判的な意識は、分配関係の歴史的に発展した性格を承認するのであるが、しかし、そのかわりに、生産関係そのものの、変わることはない、人間の本性から生まれてくる、したがっていっさいの歴史的発展から独立な性格を、ますます固執するのである。」

P1122 〈6-13 資本主義的生産様式の科学的な分析が証明した生産様式と生産関係の歴史的な規定性〉

「ところが、資本主義的生産様式の科学的な分析は逆に次のようなことを証明している。資本主義的生産様式は特別な種類の、独自の歴史的規定性をもつ生産様式だということ。それは、他のすべての特定の生産様式と同様に、社会的生産力とその発展形態との一定の段階を自分の歴史的条件として前提しており、この条件はそれ自体が先行過程の歴史的な結果であり産物であるが、それをまた自分の与えられた基礎として新たな生産様式がそこから出発するという。この独自の歴史的に規定された生産様式に対応する生産関係——人間が彼らの社会的な生活過程において、彼らの社会的な生活の生産において、取り結ぶ関係——は、一つの独自の、歴史的な、一時的な性格をもっているということ。そして最後に、分配関係は本質的にこの生産関係と同じであり、その反面であり、したがって両方とも同じ歴史的な一時的な性格をもっているということ。」(大月版『資本論』⑤ P1122B8-1)

P1123

「もし生産物の一方の部分が資本に転化しないならば、他方の部分も労賃、利潤、地代という形態をとりはしないであろう。」

……この生産様式は、ただ物質的生産物を生産するだけではなくて、物質的生産物がそのなかで生産されるところの生産関係を絶えず再生産し、したがってまたこれに対応する分配関係をも絶えず再生産するのである。」

P1123-1124 〈25-9 特定の分配関係を前提とする資本主義と権利に基づく分配関係〉

「たしかに、資本は(また資本が自分の対立物として含んでいる土地所有は)それ自身すに
にある分配を前提している、とすることはできる。すなわち、労働者からの労働条件の収

奪、少数の個人の手のなかでのこれらの条件の集積、他の諸個人のための土地の排他的所有、要するに本源的蓄積に関する章(第一部第 24 章)で展開された諸関係のすべてを前提していると言うことができる。しかし、このような分配は、人々が生産関係に対立させて分配関係に一つの歴史的な性格を与えようとする場合に考えている分配関係とはまったく違うものである。後の方の分配関係は、生産物のうちの個人的消費にはいる部分にたいするいろいろな権利を意味している。これに反して、まえのほうの分配関係は、生産関係そのもののなかで直接生産者に対立して生産関係の特定の当事者たちに割り当たる特殊な社会的機能の基礎である。この分配関係は、生産条件そのものにもその代表者たちにも特殊な社会的性格を与える。それは生産の全性格と全運動とを規定するのである。」(大月版『資本論』⑤ P1123B4-1124F5)

P1124-1126 (8-19 資本主義的生産様式をはじめから際立たせる二つの特徴と資本主義的生産の無政府性) **重要!!**

資本主義的生産様式をはじめから際立たせる二つの特徴

「資本主義的生産様式をはじめから際立たせるものは、次の二つの特徴である。

第一に。この生産様式はその生産物を商品として生産する。商品を生産するということは、この生産様式を他の生産様式から区別するものではない。しかし、商品であることがその生産物の支配的で規定的な性格であるということは、たしかにこの生産様式を他の生産様式から区別する。このことは、まず第一に、労働者自身がただ商品の売り手としてのみ、したがって自由な賃金労働者としてのみ現われ、したがって労働が一般に賃労働として現われるということを含んでいる。」(P1124F7-11)

「資本主義的生産様式を特に際立たせている**第二のもの**は、生産の直接的目的および規定的動機としての剰余価値の生産である。資本は本質的に資本を生産する。そして、資本がそれをするのは、ただ、資本が剰余価値を生産するかぎりでのことである。すでに相対的剰余価値を考察したときにも、さらにまた剰余価値の利潤への転化を考察したときにも見たように、この点にこそ、資本主義時代に特有な生産様式はもとづいているのである。——この生産様式、それは、労働の社会的生産力の、といっても労働者にたいして独立した資本の力になっておりしたがって労働者自身の発展に直接に対立している生産力の、発展の一つの特殊な形態なのである。価値と剰余価値とのための生産は、さらに進んだ展開で明らかになったように、商品の生産に必要な労働時間、すなわちその商品の価値を、そのつどの現存の社会的平均よりも低くしようとするところの、不断に作用する傾向を含んでいる。費用価格をその最低限まで減らそうとする衝動は、労働の社会的生産力の増大の最も強力な槓杆である。といっても、この増大はここではただ資本の生産力の不断の増大として現われるだけであるが。」(P1125B7-1126F3)

資本主義的生産の無政府性

「(1)商品としての生産物の性格と、(2)資本の生産物としての商品の性格とは、すでにすべての流通関係を含んでいる。……前述の二つの性格、すなわち、商品としての生産物の性格、または資本主義的に生産された商品としての商品の性格からは、価値規定の全体が、また価値による総生産の規制が、生ずる。価値のこのまったく独自の形態では、一方では、労働はただ社会的労働として認められるだけであり、他方では、この社会的労働の配分も、その生産物の相互補足すなわち物質代謝も、社会的連動装置への従属や挿入も、個々の資

本家的生産者たちの偶然的な相殺的な活動に任されてある。資本家的生産者たちは互いにただ商品所有者として相対するだけであり、また各自が自分の商品をできるだけ高く売ろうとする(外観上は生産そのものの規制においてもただ自分の恣意だけによって導かれている。)のだから、内的な法則は、ただ彼らの競争、彼らが互いに加え合う圧力を媒介としてのみ貫かれるのであって、この競争や圧力によってもろもろの偏差は相殺されるのである。ここでは価値の法則は、ただ内的な法則として、個々の当事者にたいしては盲目的な自然法則として、作用するだけであって、生産の社会的均衡を生産の偶然的な諸波動のただなかをつうじて維持するのである。」(P1124B4-1125F10)

「資本主義的生産の基礎の上では、直接生産者の大衆にたいして、彼らの生産の社会的性格が、(資本の——青山)厳格に規制する権威の形態をとって、また労働過程の、完全な階層性として編成された社会的な機構の形態をとって、相対している。——といっても、この権威の担い手は、ただ労働に対立する労働条件の人格化としてのみこの権威をもつのであって、以前の生産形態でのように政治的または神政的支配者として権威をもつのではないのである。——ところが、この権威の担い手たち、互いにただ商品所有者として相対するだけの資本家たち自身のあいだでは、最も完全な無政府状態が支配していて、この状態のなかでは生産の社会的関連はただ個人的恣意にたいする優勢な自然法則としてその力を現わすだけである」(P1126F6-B8)

P1126

「ただ、賃労働の形態にある労働と資本の形態にある生産手段とが前提されているということによってのみ——つまりただこの二つの本質的な生産要因がこの独自の社会的な姿をとっていることの結果としてのみ——、価値(生産物)の一部分は剰余価値として現われ、またこの剰余価値は利潤(地代)として、資本家の利得として、資本家に属する追加の処分可能な富として、現れるのである。しかしまた、ただ剰余価値がこのように彼の利潤として現れるということによってのみ、再生産の拡張に向けられており利潤の一部分をなしている追加生産手段は新たな追加資本として現れるのであり、また、再生産過程の拡張は一般に資本主義的蓄積過程として現れるのである。」

P1127

「さらに、いわゆる分配関係そのものを見てみよう。労賃は賃労働を前提し、利潤は資本を前提する。つまり、これらの特定の分配形態は、生産条件の特定の社会的性格と生産当事者たちの特定の社会的関係とを前提するのである。だから、特定の分配関係は、ただ歴史的に規定された生産関係の表現でしかないのである。

次には利潤をとってみよう。……だから、利潤は、ここでは、生産物の分配の主要因としてではなく、生産物の生産そのものの主要因として、資本および労働そのもののいろいろな生産部面への配分の部分として、現れるのである。……

地代について言えば、……土地所有者の収入は他の社会形態のもとでも地代と呼ばれるかもしれない。しかし、それは、この生産様式のもとで現れている地代とは本質的に違うのである。」

P1128-1129 <8-20 「分配関係」と「生産諸力」とのあいだの矛盾と対立> **重要!!**

「だから、いわゆる分配関係は、生産過程の、そして人間が彼らの人間的生活の再生産過程で互いに結び結ぶ諸関係の、歴史的に規定された独自に社会的な諸形態に対応するので

あり、またこの諸形態から生ずるのである。この分配関係の歴史的な性格は生産関係の歴史的な性格であって、分配関係はただ生産関係の一面を表しているだけである。資本主義的分配は、他の生産様式から生ずる分配形態とは違うのであって、どの分配形態も、自分がそこから出てきた、そして自分がそれに対応している特定の生産形態とともに消滅するのである。

ただ分配関係だけを歴史的なものとして見て生産関係をそういうものと見ない見解は、一面では、ただ、ブルジョア経済学にたいするすでに始まってはいるがしかしまだとらわれている批判の見解でしかない。しかし、他面では、この見解は、社会的生産過程を、変則的に孤立した人間がなんの社会的援助もなしに行なわなければならないような単純な労働過程と混同し同一視することにもとづいている。労働過程がただ人間と自然とのあいだの単なる過程でしかないかぎりでは、労働過程の単純な諸要素は、労働過程のすべての社会的発展形態につねに共通なものである。しかし、この過程の特定の歴史的な形態は、それぞれ、さらにこの過程の物質的な基礎と社会的な形態とを発展させる。ある成熟段階に達すれば、一定の歴史的な形態は脱ぎ捨てられて、より高い形態に席を譲る。このような危機の瞬間が到来したということがわかるのは、一方の分配関係、したがってまたそれに対応する生産関係の特定の歴史的な姿と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展とのあいだの矛盾と対立とが、広さと深さとを増したときである。そうなれば、生産の物質的発展と生産の社会的形態とのあいだに衝突が起きるのである。^{五七}

五七 競争と協力とに関する著述(1832年?)を見よ。

注解(一二六) マルクスが言うのはおそらく次の著作のことであろう。『競争と協同との功罪の比較に関する懸賞論文』、ロンドン、1834年。八九一
『資本論』第3巻 第2分冊『資本論』⑤ P1128B7-1129B1)

「第五章」の概要と私たちが押さえておくべきポイント

「第五章」の概要

「第五章」はまず、「普通の見方にとっては、これらの分配関係(「三位一体的定式」のこと——青山)は、自然的関係として、あらゆる社会的生産の本性から生じ人間的生産そのものの諸法則から生ずる関係として、現れる」こと、「三位一体的定式」という分配関係が資本主義的生産関係と一体不離のものであることに論及し、「とはいえ、もっと教養のある、もっと批判的な意識は、分配関係の歴史的に発展した性格を承認する」が、「しかし、そのかわりに、生産関係そのものの、変わることはない、人間の本性から生まれてくる、したがっていっさいの歴史的発展から独立な性格を、」主張することを述べます。

そしてマルクスは、「ところが、資本主義的生産様式の科学的な分析は」、資本主義的生産様式も「他のすべての特定の生産様式と同様に、社会的生産力とその発展形態との一定の段階を自分の歴史的条件として前提しており、この条件はそれ自体が先行過程の歴史的な結果であり産物であるが、それをまた自分の与えられた基礎として新たな生産様式がそこから出発するという。この独自の歴史的に規定された生産様式に対応する生産関係——人間が彼らの社会的生産過程において、彼らの社会的生産の生産において、取り結ぶ関係——は、一つの独自の、歴史的な、一時的な性格をもっているということ」を述べ、いわゆる分配関係そのものを見てみると、「労賃は賃労働を前提し、利潤は資本を前提す

る。つまり、これらの特定の分配形態は、生産条件の特定の社会的性格と生産当事者たちの特定の社会的関係とを前提するのである。だから、特定の分配関係は、ただ歴史的に規定された生産関係の表現でしかないのである」ことを述べ、つまり、「分配関係は本質的にこの生産関係と同じであり、その反面であり、したがって両方とも同じ歴史的な一時的な性格をもっているということ」を、詳しく、述べています。

その論及の中で、マルクスは、「資本主義的生産様式をはじめから際立たせる二つの特徴」として、①この生産様式はその生産物を——商品であることがその生産物の支配的で規定的な性格であるという——商品として生産すること、②生産の直接的目的および規定的動機が剰余価値の生産であることを述べ、そのなかで資本主義的生産の無政府性が現れることを明らかにします。

そして最後に、「だから、いわゆる分配関係は、生産過程の、そして人間が彼らの人間的生活の再生産過程で互いに取り結ぶ諸関係の、歴史的に規定された独自に社会的な諸形態に対応するのであり、またこの諸形態から生ずるのである。この分配関係の歴史的な性格は生産関係の歴史的な性格であって、分配関係はただ生産関係の一面を表しているだけである。資本主義的分配は、他の生産様式から生ずる分配形態とは違うのであって、どの分配形態も、自分がそこから出てきた、そして自分がそれに対応している特定の生産形態とともに消滅するのである。」と述べ、特定の分配関係が特定の生産形態とともに消滅する理由を、「この過程の特定の歴史的な形態は、それぞれ、さらにこの過程の物質的な基礎と社会的な形態とを発展させる。ある成熟段階に達すれば、一定の歴史的な形態は脱ぎ捨てられて、より高い形態に席を譲る。このような危機の瞬間が到来したということがわかるのは、一方の分配関係、したがってまたそれに対応する生産関係の特定の歴史的な姿と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展とのあいだの矛盾と対立とが、広さと深さとを増したときである。そうなれば、生産の物質的發展と生産の社会的形態とのあいだに衝突が起きるのである。」と述べて、この章を結んでいます。

私たちが押さえておくべきポイント

もう一度、この章の結びの部分を見て下さい。

マルクスは、「一方の分配関係、したがってまたそれに対応する生産関係の特定の歴史的な姿と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展とのあいだの矛盾と対立」について述べています。

一方の分配関係、それに対応する生産関係の特定の歴史的な姿(=私的資本主義的分配と資本主義的生産関係)と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展(=社会化された生産力とその一つ一つの生産能力およびその発展可能性)とのあいだの矛盾と対立。これは、資本主義を終わらせなければ解決しない資本主義的生産様式がもつ「社会的生産と私的資本主義的取得とのあいだの矛盾」で、エンゲルスの言う「根本矛盾」です。

しかし不破さんは、このエンゲルスの言う「根本矛盾」をエンゲルスが唱えた謬論だと言って否定します。その結果、「独占資本は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(大月『資本論』② P995)という言葉の意味が、まったく分からなくなってしまう。

「生産手段の集中も労働の社会化も」とは「生産の社会的性格」ということであり、「その資本主義的な外皮」とは「資本主義的私有」、つまり「取得の資本主義的形態」のことであるということが分からなくなってしまった不破さんは、資本主義的生産様式の「桎梏」——それは、「資本主義的私有」の最高形態である「独占資本」が社会的生産力の発展の足かせになるということ——の意味が理解できません。科学的社会主義の思想が理解できない不破さんは、資本主義的生産様式の内在的矛盾から取り出した「利潤第一主義」、それにもとづく資本主義の弊害の全てを「桎梏」だと言うに至ってしまいます。

その結果、「利潤第一主義」の改善、「ルールある資本主義」の確立が最大の目的となり、不破さんの眼中から資本主義的生産様式の「桎梏」である独占資本(資本主義的私有)は消え去り、「利潤第一主義」にもとづく「地球温暖化」等ありとあらゆる未解決課題が「桎梏」化(?)のあらわれとなり、大企業の内部留保の一部を吐き出すことが「利潤第一主義」を緩和させて経済成長を実現させる大道になってしまいます。

「社会的生産と私的資本主義的取得とのあいだの矛盾」を認めたくない不破さんは、エンゲルスもレーニンも配分方法のみを問題にし「夢がない」と言って、資本主義的生産様式を変え私的資本主義的取得を変革することを「夢がない」と否定し、マルクスは労働時間の短縮による「自由の国」を未来社会として描いたと、マルクスの考えを捏造します。

労働者を搾取する私的資本主義的取得の変革を「夢がない」と否定する不破さんは、「夢のある自由の国」の実現のために日本共産党の綱領から労働者階級の歴史的使命を取り除き、労働者階級は社会変革の主体から「社会変革の闘士」に格下げされてしまいました。

このように、「第五章 分配関係と生産関係」は、科学的社会主義の思想のポイントを表現した現代の私たちが留意すべき内容を含んだ「章」ですが、不破さんにとっては鬼門の「章」とも言えるでしょう。

※なお、[ホームページ 4-27-1](#)「エセ「マルクス主義」者の『資本論』解説(その1)①『資本論』第一部を読む」を検証する。」で、私は、マルクスが、『資本論』第一部の「第一三章 機械と大工業」で、唯物史観と弁証法の助けをかりて、資本主義の発展が「生産過程の物質的諸条件および社会的結合を成熟させるとともに、生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対関係を(成熟させ——青山加筆)、したがってまた同時に新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる」ことを、事実に基づいて明らかにしていることを述べ、この「章」の結びの文章とシームレスに繋がっていることを明らかにしています。